

# There 構文の派生

森竹 希望<sup>1</sup>

## 1. 経験的事実

*There* 構文では、*be* 動詞にはいわゆる意味上の主語 (associate) の人称・数の値が反映され、T と associate が一致し、それが主格を得ると考えられているが (cf. Chomsky (2000))、associate の人称・数の値が必ずしも *be* 動詞に反映されなくても良いだけでなく (=1a))、代名詞が associate として用いられた場合、それが対格として具現化する (=1b))。

- (1) a. There is/s/are lots of cookies on the table. (Scütze (1999: 469))  
b. There is only me/\*I in the garden. (Sobin (2014: 386))

本稿ではラベル付けアルゴリズムの枠組みから、上記の事実を説明することを目標とする。

## 2. デフォルト格と Phase

本稿は *there* 構文の associate はデフォルト格を得ると提案する。デフォルト格は英語では対格であり、それは構造格が付与され得ない環境下で名詞句に付与される (cf. Schütze (1997, 2001))。また、本稿は Nomura (2017) が提唱した格付与メカニズムに依拠する。Nomura (2017) は Minimal Search (MS) が行われる際、DP の [uCase] と格付与子である C/T または v\*/R が見つかった場合、DP に格が付与されると提唱した。また、それぞれの格付与が行われる領域は Phase Impenetrability Condition (PIC) に従うと主張した。

- (2) Case-Valuation  
MS seeks a head H with unvalued Case features (uCase) and its matching H and values uCase by its relation to it. (Nomura (2017: 395))
- (3) Phase Impenetrability Condition  
In phase  $\alpha$  with head H, the domain of H is not accessible to operations outside  $\alpha$ , only H and its edge are accessible to such operations. (Chomsky (2000: 108))

*There* 構文の associate には主格が付与されないため (=1b))、associate と C/T は異なる phase に属していると考えられる。つまり、associate を含む動詞句が phase を構成し、その内部に格付与可能な要素がないためにデフォルト格が付与されているはずだ。ここで、*there* 構文に用いられる *be* 動詞の phase 性について議論する。Kayne (2016) が示しているように、*there* 構文で associate が代名詞の場合、それに必ず強勢が置かれる。(4) では大文字は強勢を示す。

- (4) Q: Who can we get to help us?  
A: Well, there's HIM/\*him. (Kayne (2016: 1, 一部修正))

Rizzi (1997) 以降、焦点化は CP phase でなされると考えられてきたが、Belletti (2001, 2004) や Maeda (2014) は v\*P でも焦点化が可能だと主張した。Belletti らの議論に従うと、焦点化と phase には相関がある。つまり、焦点化が行われる場合、v\*P は phase を構成すると考えられる。このことから、*there* 構文に用いられる動詞句は v\*P phase を構成すると主張する。故に、associate は v\*P phase に含まれるが、*be* 動詞は一種の非対格動詞であり、格付与能力はないため (cf. Deal (2009))、phase 内部に格付与子が存在せず、associate はデフォルトとして対格を得ることになる。

## 3. {There, Associate} 分析

本稿は *there* と associate が外的併合し、{ $\alpha$  *there*, associate} の状態で派生に導入されると提案する。この時、*there* は DP であり、associate は NP である。もし *there* が集合  $\alpha$  の中に留まる場合、一致もないため適切なラベルが保証されないが、それでは interface が集合  $\alpha$  を解釈することができず派生が破綻する (cf. Chomsky (2013))。故に、*there* が義務的に集合  $\alpha$  の中から移動しなければならないと主張する (cf. Moro (2000))。

## 4. 派生

まず *there* が持つ素性についての想定を述べる。その議論は多岐に渡るが (cf. Richards (2008), Deal (2009))、本稿は *there* が解釈不可能な [3-person] と [u-Number] を持つと想定する。また、[u-Number] に関しては Chomsky (1981) も想定しているように、associate から値を得ると考える。また、Stowell (1978) 以降、associate

とそれに後続する前置詞句などが小節を成すとする分析が広く用いられているが (cf. Lasnik (1992, 1995)), そうだとすると、小節主語からの抜き取りは不可能だが (=5a)、associate からの抜き取りは可能である事実 (=5b) を説明できない。従って、本稿では associate に後続する要素 (ここでは前置詞句) は v\*P に付加すると想定する (cf. Kuno (1971), Williams (1984), Moro (1997), Hartman (2008))。

- (5) a. \*Who do you consider [supporters of *t*] beneath our notice? (Bruening (2010: 524))  
 b. Which wall do you think there was [a picture of *t*] in the garden? (Moro (1997: 139))

ここで、*there* 構文の具体的な派生を概観する。

- (6) [<sub>i</sub> C [<sub>0</sub> there [<sub>η</sub> T [<sub>ε</sub> ~~there~~ [<sub>δ</sub> R-v\* [<sub>γ</sub> [<sub>α</sub> {~~D-there~~} [<sub>N</sub> several cats]]] [<sub>β</sub> R {<sub>α</sub> {~~D-there~~} {~~D-several cats~~}}]]]]] [<sub>P</sub> in the backyard]]]]] (α=N, β=R, γ=<phi, phi>, δ=ε=ζ=R-v\*, η=T, θ=<phi, phi>, ι=C)

まず、*there* と *several cats* が併合する。その時、*there* は *several cats* の持つ [Plural-Number] の値を得る。その後、α の集合に R 及び v\* が順次併合する。そして v\* が R に unvalued phi-feature ([<sub>u</sub>phi]) を継承し、R と *several cats* が一致する。その後 α が R の指定部へ移動し、そこから *there* が v\* の指定部へ移動する。そして、PP が ε に Pair-Merge する。v\*P レベルでの派生が終了したので Labeling Algorithm (LA) が適用され、α=N, β=R, γ=<phi, phi> と決まる。そして R が v\* へ移動する。次に CP レベルでの派生を見る。まず T、C が順次併合する。その後 C から T へ [<sub>u</sub>phi] が継承され、v\*P 指定部にある *there* と T が一致する。その後 *there* が TP 指定部へ移動する。ここで LA が適用され、δ=ε=ζ=R-v\*, η=T, θ=<phi, phi>, ι=C と決まる。

## 5. 特殊な一致

本節では (1a) に見られる特殊な一致に関して、以下の提案を行う。

- (7) a. *There* が associate から [Number] の値を得る操作は随意的に行われる。  
 b. *There* が [Number] の値を得なかった場合、T と *there* は [Person] 素性のみ一致し、[Number] の一致は行われない。その場合、SM interface では T の [<sub>u</sub>-Number] は [Singular-Number] として具現化する。

(7a) は文字通り、*there* が [Number] の値を得なくても良いことを意味する。*There* は CI interface では解釈の対象にならないだけでなく、SM interface で *there* を解釈、つまり spell-out するために *there* の [<sub>u</sub>-Number] の値は関係ないことから、*there* の [<sub>u</sub>-Number] に値が付与されなかったとしても、それぞれの interface で派生が破綻しないと主張する。(7b) は一見すると ad hoc な提案のように思われるかもしれない。しかし、Belfast 英語を見ると、[Number] が一致せずとも動詞が三人称単数として現れ得る場合がある (Singular Concord: Henry (1995))。

- (8) a. The eggs are/is cracked. [Belfast] (Henry (1995: 16))  
 b. These cars go/goes very fast. [Belfast] (*ibid.*)

さらに英語のみならず、他言語、特に Icelandic でも T の [<sub>u</sub>-Number] が値を得なくとも [Singular-Number] として具現化できる例もある (cf. Sigurðsson (1993))。故に、(7b) は *there* 構文に限定的な制約ではなく、通言語的に支持されると考えられる。

ここで、特殊な一致が起こる例は、容認度に個人差があることが知られている。さらに、Sobin (1997) が実施した調査によると、それらの例は容認度がかなり低いことが指摘されている。この事実をラベルの観点から説明する。Chomsky (2013, 2015) では英語において {<sub>α</sub> DP, TP} の集合では DP と T が一致した結果、α に [Person] と [Number] のラベルが与えられる。しかし、特殊な一致が行われる場合、*there* と T は [Person] を介してのみ一致することから、[Number] のラベルは付与されない。本稿はこのラベルの deficiency、つまり deficiency なラベルを認めるかどうかの違いが容認度の低下や個人差を引き起こしていると考えられる。

<sup>1</sup> n.moritake.315@gmail.com

### 主要参考文献

- Kayne, Richard (2016) “The Unicity of *There* and the Definiteness Effect,” *lingbuzz*/002858.  
 Maeda, Masako (2014) *Derivational Feature-based Relativized Minimality*, Kyushu University Press, Fukuoka.  
 Nomura, Masashi (2017) “Pair-Merge and Feature-Valuation via Minimal Search: Evidence from Icelandic,” *WCCFL* 34, 395-403.  
 Schütze, Carson (2001) “On the Nature of Default Case,” *Syntax* 4, 205-238.  
 Sobin, Nicholas (1997) “Agreement, Default Rules, and Grammatical Virus,” *Linguistic Inquiry* 28, 318-343.